

ここはみなさんが主役のひろばです。
身近な話題をどんどんお寄せください。

■役場企画室 TEL42-1613

みんなのひろば

5/9

心に残る体験活動を

小学生がきのこの植菌作業



▲ナラの木にきのこの菌を植え付ける児童たち



▲ドリルで木に穴をあける作業

小学校の野外活動が「あいの沢」で行われ、小学生がきのこの植菌を体験しました。

この活動は、村森林組合が「きのこの植菌と生育観察を通して小学生に心に残る感動を」と呼びかけ、各小学校がこれを受けて取り組んだもので、3校から3～5年生80人が参加。

児童らは、森林組合職員の指導を受けながら、一人当たり3本のナラの木に、2種類のしいたけの菌を植え付け、そのうち1本には自分の名札を付けました。

この日植菌したほど木は、今後児童らが観察を続けながら育てていくこととしており、早いものは来年春頃に収穫できる予定です。

5/9

川村ツヤ子さん(草野)に

厚生労働大臣表彰



▲菅野村長から表彰状を受け取る川村さん(写真右)

村の民生委員児童委員を昨年11月に退任された川村ツヤ子さん(草野)に、厚生労働大臣の表彰状が贈られました。

川村さんは、昭和59年から平成16年までの21年間にわたり、村の民生委員児童委員として、住民からの相談などに応じてきました。今回の表彰は、その長年の功績が認められたものです。

贈呈式は役場村長室で行われ、菅野村長から表彰状を受け取った川村さんは、「主に一人暮らしや求職に関する相談が多かったです。この仕事を続けて良かったことは、弱い立場の人の相談に応じてくれたこと」と活動を振り返っていました。

5/30

直木賞作家三好京三さんが熱弁

相農飯館分校 文化講演会

農飯館分校



▲講演する三好さん



▲講演会のようす

「相農飯館分校創立記念文化講演会」が、同校の視聴覚室にて行われ、岩手県前沢町在住で直木賞作家の三好京三(本名・佐々木久雄)さんが熱弁をふるいました。

この講演会は、同校同窓会飯館分会(佐藤長平会長)が、5月21日の学校創立記念日にあたり、講演会を通して生徒たちに充実した学校生活を過ごし、将来の進路実現に役立たせようと主催したものです。

講演の中で三好さんは、ご自身の学生時代を振り返りながら、小説家になるうと決意した理由や小学校の教諭を務めた過去などを紹介しました。

会場には、生徒や村民など約100人が詰めかけ、三好さんの講演に熱心に聞き入っていました。

鳥の目 虫の目



年のわりに、目はいたって良い方だと自負していました。

ところが、1～2年前から辞書の小さな字が読みにくくなり、さらに昨年の秋頃から離れている方の顔が見えにくくなり、挨拶されても失礼をしてしまつてということがありました。

眼科医によると、眼底出血しているので、見えるようにするにはメガネをかけないと、ということでした。

遠くを見るメガネと近くの字を見るメガネと2つかけかえながらの不便さに、いよいよ自分も青年(?)ではなくなつたなどの思いがっかりしていったところです。

そのような不便さから、ふと、ある画家の素晴らしい言葉を思い出したのです。原田泰治という方であり、絵を見た方も多いでしょう。

彼は生まれて間もなく小児マヒにかり、足が不自由になってしまいました。歩けない子供を不びんに思い、両親は時々裏山の高台に連れて行って眼下を見おろさせてくれたそうです。

一方、友達の遊びにも加われず、一人で足元の虫や草花をじっくりと見る習慣もついたのでした。

したがって、「私は小児マヒになつたお陰で『鳥の目』と『虫の目』の両方を持つことが出来ました。そのお陰でこのような絵を描けるようになったのです」という話を直接本人から聞く機会があり、大変感動したものでした。自分の不幸を他人のせいにはせず、むしろプラスとしたことも素晴らしいが、それ以上に「鳥の目、虫の目」で見るといふ話がとても強く印象に残つたものでした。

今、激動の時代です。その中で飯館村は自立の道を歩んでいく訳です。首長として、高いところから全体を見わたす目と、足元の問題をしつかりと見すえる両眼がとても大切なのだということ、かけかえするメガネの不便さの中から改めて心に刻んだことでした。

平成17年5月30日

飯館村長 菅野 典雄